

わたしの原風景

8

上條喬久

かみじょうたかひさ
アート・ディレクター

原風景の旅



昭和十九年夏。四歳の私は東京から鳥取県の倉吉市に疎開した。

倉吉市は母方の祖父母が暮らす地である。父が出征し、母が三人の幼子と留守宅を守っていたが、東京は既に戦火を免れ得ない状況になっていた。そこで、子どもの安全のためには子どもたちだけでも東京を離れる必要があった。だが、四歳の私にはその状況を理解できるはずも無い。祖母が迎えにきてくれて、倉吉に行く事になった。

東京駅では母も一緒に汽車に乗った。汽車はその時が初めてで、ウキウキする気分だった。汽笛が鳴り、汽車が動き出す瞬間に母は汽車から降りてしまった。突然の恐怖。母に捨てられたと絶望した。四歳以前の記憶は一枚の写真のように断片的なものだが、汽車と一緒に私の記憶も連続して映画のように動き出す。自我の目覚めはそうして突然始まった。真夜中に京都に到着し、真つ暗なホームを歩いて山陰線に乗り、翌日の夕方に疲れ果てて倉吉に辿り着いた。

翌朝、何もかも初めて見る別世界の中にいた。祖父の家の裏庭は野菜畑になっていて、その先に小川が流れ、眼を上げるとこんもりとした緑の山が輝いている。その日から野菜畑でのびのびと遊んだ。蟻、ミミズ、かえる、蝶、トンボに夢中になり、母のいない寂しさを一気に忘れた。倉吉で四年間を過ごし、終戦の翌年に父が復員したのをきっかけに、昭和二十二年に東京に戻ってきた。

中学生の時に祖父が亡くなり、祖母も東京に出てきたので、その後は訪れることも無く、倉吉は遥かに遠い別世界になってしまった。平成十二年夏。私は倉吉を訪ねてみようと思いついた。その年、還暦を迎えて、自分史を遡っていると倉吉に辿り着いたのだ。飛行機で行く五十数年ぶりの倉吉は、拍子抜けするほど近かった。余戸谷町にあった祖父の家は建て替えられて、家並みもすっかり変わっていた。記憶の風景は消えていた。だが、裏庭の野菜畑は奇跡的に記憶のままだった。見上げると山が微笑んでいる。土の匂い、小川の煌めき。まぎれも無く、私は、私の原風景の中に立っていた。